

これまでの経歴・経験・実績をふまえ、研究テーマを選ぶに至った理由とその背景を述べます。学部で獣医学を学びました。2年間の就職の後に、退職して大学院医学研究科博士課程へ進学しました。がん研究の課題に取り組み、修了したのが30年前になります。

いくつかの研究所勤務を経た2006年からの職場では、研究課題に「地域」を盛り込みました。里山の管理と里海の保全がそれぞれ法制化された時期でした。広域都市圏の生態系構成要素である野生動物も養殖カキも、健康状態は必ずしも芳しくないデータが蓄積されてゆきました。2017年から現在の職場に移り、里山・里海の現状を自然科学の枠組みで発信しようと、両方に存在する環境重金属を手掛かりに野生動物とマガキを対象として対象地域の生態系評価を試みる研究テーマを選ぶに至りました。

研究する場として放送大学大学院博士後期課程を選んだ理由は、通信教育の有効性を実感していたからです。2003年から放送大学講義を履修し始め、修士課程（教育開発プログラム）に入学し、（被爆60周年記念の）教材開発で波多野誼余夫・安藤寿康の両先生からご指導いただきました。未踏領域の研究であったにもかかわらず、定期的な指導（通信指導と6ヶ月毎の対面指導）で、修了にまで到達する体験をしました。

主研究指導教員を選んだ理由は、学生募集要項にある加藤和弘先生紹介文に自分の研究テーマと合致するキーワードを見つけたからです。「研究対象に農村地域、河川など人間活動の影響が強い空間を含む」との記載がそれで、生物群集とそれを取り巻く環境条件の関係を見える化し、成果を生物多様性の保全や生息場所の再生に応用する研究の指導を受けたい、と考えました。

研究法（メジャー分野）の授業では、毎年プログラム発表会が開催されました。他の学生さんの研究進捗状況に、焦燥を覚えました。研究法（マイナー分野）の授業では、コミュニケーション学研究法を学びました。分野に未熟な者へも、大橋理枝先生はTheories of human communicationという最良の教材を用いて総論から教授してくださいました。英語を正確に読み取ることを決意させられた講義でした。自然科学特論の授業では、谷口義明先生が研究時間確保術を紹介くださり、感銘を受けました。

通信指導の頻度等を紹介します。博士予備論文提出までは、加藤先生へ進捗状況を作表・作図して毎月送信し、年度末に成果リストを送信しました。サンプル数が必要十分な数に達するまでに3年を要しました。博士予備論文審査とこれに続く博士論文審査の段階では、副査の先生方から膨大な数の指摘を受けました。納得できない部分のやりとりを文字だけでしかも誤解のないよう表現するには技術が必要です。加藤先生による通信指導の文章は常に冷静沈着であったので、ぜひ修得しようと思いました。以上の体験から、博士論文作成に至る過程で通学制と通信制の差はないことと、今後も通信制制度が進化することを確信しました。